第490号 昭和61年 4 月 20 日発行（毎月 20 日発行）
昭和 49 年 8 月 31 日 第三種郵便物認可

1986 年（昭和 61 年）
4 月 号（No. 490）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150 円

目　次

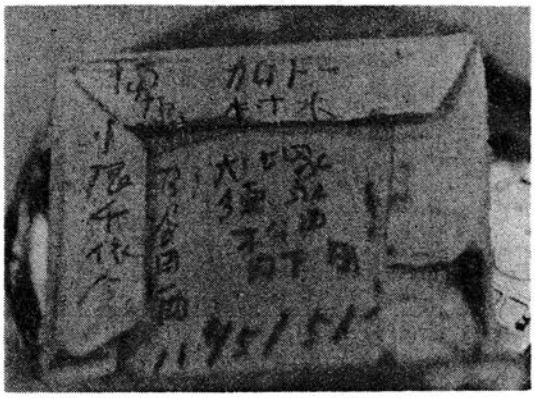
マナスル登頂 30 年に想う
大塚博美 ……（1）
アーネスト・サトウ展を見る ……（3）
海外の山 ……（4）
「ポーランドの超人クライマーたち」
図書紹介 ……（5）
「お花畑」「ミズバショウの花いつまでも」「黄色いテント」
東西南北 ……（5）
「山岳博物館を考える会」「木暮理太郎翁碑前懇親会報告と予告」「三峰，妙法ケ岳と羅漢山」
報告 ……（7）
「高所障害の後遺症についての講演会」「会員懇談会『車窓の山旅・中央線から見える山』」「北海道支部　真狩スキー合宿」
会務報告・ルーム日誌・会員移動 ……（8）～（10）
図書受入報告　図書委員会 ……（8）
追悼　交野武一氏，高橋照氏 ……（6）
お知らせ ……（11）
「海外委員会より」「東北ブロックシンポジウム」「登山医学シンポジウム」「若葉会山行」「新版・山日記」

▶日本山岳会事務取扱時間
月，火，木，土曜　10時～20時
水，金曜　13時～20時
日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

マナスル登頂三十年に想う

大塚博美



マナスル山頂のピース缶に入っていたマッチ箱

一九五六年五月九、十一日、ヒマラヤの処女峯マナスルは日本隊によって登頂された。

今年の五月で満三十年になる。

そんなとき、一月の新聞紙上で、山田昇、斉藤安平両氏のパーティが、僅か八日間のアルパインスタイルによって、マナスルの無酸素、冬期登頂に成功したのを知ってびっくりした。加えて、頂上で加藤喜一郎さんが置いて来た記念のピース缶を拾って来た、というエピソードのおまけ付きで、何かめぐり来る因縁を強く感じないわけにいかなかった。

当時、若手の一人として登山隊に参加した私にとって、山田隊の示したアルパインスタイルとその成果が示すものは、マナスル初登頂以降の登山の進歩と変遷、その三十年の歴史の一つの節目を教えてくれるようであった。

古いマナスル登山の想い出を縷々語るのは本意でないし、今更という気が強い。

誰でも、あの時代、ヒマラヤ登山に誘われたら全力を尽すのは当然だからだ。

山田隊のスパークは、私に強いインパクトを与えたので、その感想を留めておきたい。

エベレストのハント隊が、英国の宿願を三十余年振りに果たした一九五三年五月、日本のマナスル第一次隊は、七五〇〇㍍で断念した。もうエベレストの初登頂はなくなった、と思う反面、マナスルはこれからだ、と体を熱くしたのを憶えている。

ハント隊の残したヒマラヤの巨峯への登山の戦略と戦術は、完成されたものであった。

マナスルは、その極地法登山を大いに参考にし、特に酸素の積極的使用という点では強い刺戟を受けた。

不運の第二次隊は、その力が発揮されず、最後のバトンが第三次隊に渡される形となった。

当時（昭和三十年）の社会状況の中で、許される限りの準備とテストを繰り返し、計画実施の万全を期した。

そして、天候や運も呼び込んで、余裕を残し成功した。決して自慢する訳ではないが、マナスル登山が、英国のエベレスト登山と比して少しも劣らない、完全な成功だったと思っている。

それは、登山の当初に当って示された、隊のビジョン、ポリシーや具体的なタクティックスが、終って見ると、ほぼその通り実施されていたからである。

マナスル登山の成功が、単にJACの登山隊だけで成し得たとは誰も思っていない。反面またマナスルの成功が、一、山岳会の成功とも受けとめられなかった。

一九五二年の踏査隊から、五六年の第三次隊まで足掛け五年、総経費一億円余り。当時の産業・経済界、科学技術陣は、毎日新聞社を中心にして、総力をあげてバックアップしてくれた。

登山装具、食糧等携行品は、その国の産業、科学技術の水準を物語るものとして見られた。準備にも、募金にも、数多くの熱心な会員の、正に献身的な協力なくしては、この計画は続かなかったのである。

殆んど、ヒマラヤ巨峯への経験、情報ゼロで始まった当初から僅か五カ年、それは、ヒマラヤ黄金時代の一九五〇年代とはいえ、当時の、エネルギーの凄さを物語るものだ。

山田隊が拾ったピース缶の中にJACのレッテルが張ったマッチがあった、という報道に、私は三十年のタイムトンネルをくぐる思いであった。

「…その日、三鷹の低温低圧実験室は、装具、器具類のテストで賑

お知らせ電話 234六六五九

わっていた。酸素ボンベ、マスク。防寒具類、炊事道具類。それにローソク・マッチ類に至るまで、くり返し慎重にテストされ、選別された…」。

山田隊が持帰ったマッチは、あの実験室の中で、最も使いよい、と選ばれたものである。

一事が万事、何から何まで、手さぐり、手作りであった。実にやり甲斐があり、充実感があったことを憶えている。

第三次隊、隊員十二名、シェルパが二十二名、隊荷十二トン、ポーター四百名。重厚な極地法登山を展開した。

山田隊はシェルパなしの二名で、冬期の八日間。荷物も費用もすべて自前で僅か。完璧なアルパインスタイルで見事である。

三十年の歳月は、日本を豊饒な社会にし、登山の方法も思考も、当然のことながら変化させた。

三十年の間を置いて、双方の隊は全く対照的である。だがここで両隊を比較することはおろかなことで意味がない。

今、なぜアルパインスタイルなのか、という問いが岳界の尖鋭的な登山家の間で真剣に議論されているが、私見を述べるならば、極地法の対極にあるのが、アルパインスタイルであり、双方とも、登山の一つの方法にすぎないもので、どちらがいい、悪いというものではないと思う。個人の選択によるものだと思っている。

極地法にも長所・欠点はある。アルパインスタイルもこの先駆者であるマンメリーが身をもって示したように、スリルに富むが危険がいっぱいであることを示唆している。

英国がエベレストを完了するまでの長い間にも、酸素論議や、テイルマンの提唱した小数軽量登山主義などがあった。これを見ても分かる通り、登山は結局のところ、常に個人の選択に帰着するということである。

人数の大小にかかわらず、登山の成否や、楽しみ、メンバーシップやチームワーク。組織と個人の関係など考え併せて見ても、皆んな個人のクライマーの資質に帰するところが大きい。

マナスル登山は以降の海外登山の教本となり、多くのものを登山界に残した。マナスル西壁を含めP・29、ヒマルチュリも日本隊が初登頂し、マナスル三山は日本と深いかかわりを持った。また、あの暗い時代に明かるいスポーツのニュースとして、フジ山の飛魚、古橋氏の快挙と併せ、マナスル登山成功のニュースは日本国中に拡がり、国民の歓迎を受けた。今では考えられないものがある。

一九八〇年代の現在の登山界は、何といっても、中国のチョモランマ開放、冬期登山の始動、そして無酸素登山と少数軽量化が特

注：Mはメンバー　Pは高所ポーター　**マナスル（MANASLU）登山・偵察隊一覧**　（山と渓谷社「岩と雪」より）

年	季節	隊（国）名	隊長名（年齢）	人数 M	人数 P	登頂者 M	登頂者 P	死者 M	死者 P	ルートおよび成果
1950	8	イギリス（偵察）	Harold W. Tilman (52)	6	4	—	—	—	—	北西面および北東面を偵察
1952	post	日本山岳会（偵察）	今西錦司 (51) K. Imanishi	6	5	—	—	—	—	北東面にルートを発見，試登を行なう
1953	pre	〃　（第1次）	三田幸夫 (52) Y. Mita	15	15	—	—	—	—	北東面マナスル氷河ルート　7750 m まで
1954	〃	〃　（第2次）	堀田弥一 (45) Y. Hotta	14	23	—	—	—	—	サマ住民の反対にあい Ganesh Himal へ
1955	post	〃　（先遣隊）	小原勝郎 (42) K. Ohara	3	4	—	—	—	—	C 3まで作りプラトーへのルートを偵察
1956	pre	〃　（第3次）	槙有恒 (62) A. Maki	12	20	3	1	—	—	北東面ルートから初登頂成功（2次4人）
1964	〃	オランダ	Jan Boon	5	—	3	2	—	—	ノース・コルから北峰に初登頂
1970	post	日本西壁隊（偵察）	青木敏 (27) S. Aoki	2	1	—	—	—	—	西面偵察　北西稜に登路の見当をつける
1971	pre	日本マナスル西壁隊	高橋照 (57) A. Takahashi	11	11	2	—	—	—	北西稜を初登攀　15 年ぶりの通算第2登
〃	〃	韓国（第1次）	金祐燮 Ho Sup Kim	8	—	—	—	1	—	北東面ルート　1人転落死 7600 m で断念
1972	〃	〃　（第2次）	金禎燮 (37) Jung Sup Kim	12	12	—	—	5	10	C 3（6500 m）が雪崩に襲われ 15 人が死亡（安久氏）
〃	〃	オーストリア	Wolfgang Nairz (28)	9	11	1	—	2	—	ツラギ氷河から南西壁をへて登頂（メスナー）
1973	〃	西ドイツ	Gerhard Schmatz (44)	8	—	2	1	—	—	北東面ルートから登頂
〃	post	スペイン（第1次）	Jaume Garcia Orts	12	—	—	—	—	—	C 1, C 2 が雪崩を受け断念
〃	pre	日本女子隊（偵察）	中世古直子 (35) N. Nakaseko	3	2	—	—	—	—	東稜試登と偵察
1974	〃	〃	佐藤京子 (35) K. Satoh	13	15	3	1	1	—	東稜断念　北東面から登頂（女性初登頂）（鈴木行方不明）
1975	〃	スペイン（第2次）	Jaume Garcia Orts	12	—	2	1	—	—	北東面ルートから3人が登頂
1976	〃	韓国（第3次）	金禎燮 (41) Jung Sup Kim	19	—	—	—	—	—	北東面ルート　雪崩で1人負傷　断念
〃	post	イラン　日本	Mohammed Khakbiz (52)	20	23	2	1	—	—	北東面ルートから登頂　秋は初めて
1977	pre	西ドイツ　ネパール	Gerhard Lenser (48)	9	—	—	—	—	—	東稜（？）C 3まで作ったが断念
〃	post	フランス	Jean Frehel	5	—	—	—	—	—	東稜（？）7560 m で断念
1978	pre	アメリカ	Glenn Porzak (30)	11	5	—	—	—	—	北東面ルート　7300 m で断念
〃	post	日本オリンパス隊	清水清二 (32) S. Shimizu	3	6	—	—	—	—	北東面ルート　8000 m で断念
1979	pre	イタリア	Lorenzo Massarotto	6	—	—	—	—	—	北東面ルート　7500 m で断念
〃	post	アルゼンチン	Guillermo Vieiro	14	—	—	—	1	—	東稜を試みたが 6550 m で断念
〃	〃	チェコスロヴァキア	Vladimir Kurpika	10	—	4	—	—	—	北稜から北峰Ⅱに登った
1980	pre	韓国（東國大学）	李仁禎 (36) In Jung Lee	7	6	1	2	—	—	北東面ルート　韓国初の登頂に成功
〃	〃	ポーランド	Janusz Ferenski	9	2	—	—	—	—	南稜を試みたが 6550 m で断念
〃	post	オーストリア	Hanns Scheil (42)	7	—	—	—	—	—	北東面ルート　7400 m で断念
〃	〃	チェコスロヴァキア	Dina Sterbova (40)	12	4	1	—	—	—	南稜断念　ノース・コルから北峰に登頂

徴的である。詳細はヒマラヤ登山史に譲り、でここでは触れない。

八千㍍の処女峯が登り尽くされたヒマラヤ黄金時代（一九五〇年代）。より困難なバリエーションルートからの登山を行なった、俗にいう、ヒマラヤ鉄の時代（一九七〇年代）。

この後をうけ、クライマーは、より厳しい自然条件の中に投入されている。無酸素で、少人数、軽量化へと。

この一面を物語る代表的なのがチョモランマ（北方から）であり、エベレスト（南側から）での登山活動だろう。

メスナーによる北側からの単独・無酸素成功。ポーランド隊の冬期初登頂。

日本隊の悲劇的で、ドラマティックなエベレストの無酸素登頂後の遭難。また、東壁（カシンフェイス）を登った米国隊（酸素携行）は、南峰付近の稜線上で二つの日本隊とバッタリ出合う（イエティ隊と山学同志会隊で何れも無酸素）。

エベレストも日本の冬山と同じになったようだ。しかし、日本のイエティ隊の二名は登頂ビバーク後、還らぬ人となってしまった。

また、夫婦で各々南と北から登って頂上でランデブーしようという計画を実行し、南からの隊が登頂しただけに終って、ランデブーは成功しなかったものの、これを実施した高橋夫妻隊の力。自由で束縛されない、登山本来の姿に近い、ユニークな計画である。

しかし反面、エベレストであるが故に、報道のニュースバリューや、企業PRのメリットを追うあまり、計画が次第にエスカレート、背伸びして行く。数多くの悲劇の中にはこの影を認めざるを得ない。この時代、日本のトップクライマーが五指にも余って遭難死していることは、注目すべき事柄である。安易な論評、批判は避けねばならぬと同様に、単に、これを讃美するような傾向は厳に戒めねばならない。

一つの目標に向かって、忍耐強く、何年も掛けて計画を進めていく。こういうパターンの思考や行動は、若者には歓迎されなくなった。

登山も所詮は社会生活の制約を受け変化して行く。家族・仕事、職場での立場や束縛。

高峯への登山は、いろいろな意味で益々厳しい条件につつまれていく。個人の選択は、一つの枠にとどまることなく、自由だ。

これからの登山は、大きな組織的登山より、スピーディで拘束されないものへと向かう傾向がある。

情報は即財産、力となり、登山のそれも、より豊富に、組織的に細分化され個人の選択にまかされていくであろう。

山田隊のニュースは、マナスル登頂三十年の節目と、この三十年のヒマラヤ登山のいろいろな出来事を想い出させてくれた。

そんな想いの中で、山から還らぬ人となった数々の優れたクライマー達のことを考え、山で死んではならない、とつくづく思った。

そして、二十一世紀、JAC創立百周年を迎える頃、登山界はどんな方向に向かっているのであろうか、興味は深い。

アーネスト・サトウ展を見る

近ごろヨコハマがおもしろい。昨年秋には、市民文学散歩の一部としてウェストン旧宅跡などをたずねる催しがあり、島田巽、石川治郎、神谷量平諸氏など大先輩とたのしいひとときを過ごしたが、大桟橋入口に近い横浜開港資料館では、昨年十一月十三日から一月二十九日まで、アーネスト・サトウ展が開かれていた。終了間近い土曜日、東京からあわててかけつけてみたが、内容豊かで大変おもしろかった。見のがした方も多いようなので、展示内容の一部をご

1981	pre	西ドイツ　スオー	Hans von Kaenel (41)	28	13	13	2	—	—	公募隊　北東ルートから大量 15 人が登頂
〃	post	日本オリンパス隊	加藤保男 (32) Y. Kato	4	4	3	—	—	—	北東面ルート　登攀メンバー 3 人が登頂
〃	〃	フランス	Pierre Beghin (30)	4	2	2	—	—	—	西壁初登　2 人が頂上に達す
1982	pre	スペイン	Enric Font	6	—	—	—	2	—	北東面ルート　雪崩で 2 人を失い断念
〃	post	フランス　イタリア	Louis Audoubert (47)	14	—	1	1	—	—	北東面ルート　隊長とシェルパ 1 人登頂
〃	〃	フランス	Jean Paul Balmat (36)	5	—	—	—	—	—	東稜 6200 m で断念　北東面転進は不許可
1982 83	冬	日本ヒマラヤ協会	山田昇 (32) N. Yamada	10	3	—	—	1	—	冬期初の挑戦　北東ルート 7650 m で断念（佐久間スリップ）
1983	pre	ユーゴスラヴィア	Vinko Maroevic	—	—	—	—	2	—	南稜 7100 m まで　ツラギ氷河で雪崩遭難
〃	post	西ドイツ	Guenter Haerter	9	—	4	2	—	—	南稜 7500 m で断念　南壁から登頂
〃	〃	オーストリア	Wilfred Studer	5	—	—	—	—	—	東稜 7400 m で断念
〃	〃	韓国	Young Ho Huh	3	—	1	—	—	—	北東面ルートから単独登頂
1983	冬	カナダ	Alan Burgess	4	6	—	—	—	—	北東面，12/10．7100 m 強風で断念
1984	冬	ポーランド	Leck Korniszewski	11	—	2	—	1	—	南西壁，1/12．冬期第 1 登
1984	pre	ユーゴスラヴィア	Ales Kunaver (48)	4	—	2	—	—	—	南西壁，5/4．2 回ビバーク，BC から 18 日間
1984	〃	西独　スイス	西独 Günter Strum (43) スイス，Hans Eitel	12	—	8	2	—	—	北東面，4/30．2 人，5/7．2 人，5/11．4 人
1984	post	ポーランド	Janusz Kulis	8	—	2	—	—	—	南稜，東面ブンゲン氷河からコル→南東壁，10/20．O_2 なし
〃	〃	イタリア　スイス	チェザーレ・チェザ・ビアンキ	6	—	—	—	—	—	北東面 7500 m で断念　スキー使用
1985	pre	オーストリア	Wilfried Studer (28)	1	1	—	—	1	—	東稜—北東面，5/1．C 3 からノーマルルート，雪崩，
〃	post	日本　青森県岳	対島巌 (39)	9	—	—	—	—	—	東稜 6300 m で断念
〃	〃	スペイン	Felipe Uriarete	6	—	—	—	—	—	北東面 6300 m で断念
〃	〃	日本　イエティ同人	降旗義道	7	—	—	—	1	—	北東面，スキー隊，7150 m で断念，雪崩
〃	冬	日本	山田昇 (35) 斎藤安平 (32)	2	—	2	—	—	—	北東面アルパインスタイル，BC，12/5～12/14．2 人

延 51 隊，成功 20 隊，26 登，延 72 人。
死亡者名（内 雪崩，21 名が顕著），事故件数 11 件（内 雪崩 5 件）他スリップ，プラトー上行方不明 etc

紹介する。

一八六五年（慶応元年）の俸給（年俸）が図解されていたが、通訳生のサトウが二百ポンド。富士山に登った初の欧米人で、英国公使兼総領事のオールコックが、三千ポンド。当時の一ポンドがどのくらいの価値を持っていたのか、いま調べている余裕はないけれども（編注）、重要な役割をはたした通訳生と公使兼総領事の格の違いをこの年俸が表わしているとしたら、これもまたさまざまなことを考えさせる興味深い資料の一つであった。

しかし、やはりいちばん興味深かったのは、アーネスト・サトウと武田久吉との間にかわされた手紙が公開されていたことである。

一八九〇年八月十五日付でウルグァイのモンテ・ヴィデオから当時七歳の久吉にあてたサトウの日本語による手紙――。（原文のまま）

「久吉はおほきくなったら英語を御まなびなされ　又おとっさん留守中はおっかさまを大事に致し　好く御咄しをお聞きなされ

先御返事迄

八月十五日

父　エルネスト　サトウ

久吉へ　」

一八九三年一月四日付の手紙は英文。九歳の武田久吉宛。

「My dear Hisakichi,

Thank you very much for your letter of October 22nd last year, signed in English letters. I am very glad you are learning to write and hope that you will soon be able…」

ヒサキチと呼びかけているのが目をひく。他の手紙ではヒサヨシとなっている。

一九〇一年五月十四日付の武田久吉のサトウ宛英文の手紙も展示されていたが、これにはサトウの添削の筆が入っている。以下、括弧内がサトウの添削。

「My dear father,

I made a botanical toor (tour) to Atami and its vicinity in March of this year in (during) my holidays. Before that I received 72 sheets of the botanical drying paper, which were sent by my brother.　」

同じ年九月二十三日付のサトウの手紙。

「If you go on with English and learn German, you can in a couple of years or so, go to England if you like, and I dare say I could help you to pursue your botanical studies at Kew or in Germany, if you like that better. Above all I want you to be a good boy and kind and obedient to your mother, and affectionate to your brother and friends. That is better than fame, or money or high position.　」

上級学校への入試に失敗した久吉へ、イギリスかドイツへ留学する気があるなら援助すると書いているのはともかく、母親に孝養を

海外の山

ポーランドの超人　クライマーたち

その国の最高峰は、二千五百㍍に及ばない。二千㍍を越える「高峰」は十一を数えるが、海抜三百㍍以上の高地は三十一万平方㌔の国土の、わずか八・七％を占めるにすぎず、登山人口も一万人に満たないといわれる。

それなのに、ここ数年この国、ポーランドのクライマーたちがヒマラヤの高峰で見せつけてきた強さは、一体どこから来るのだろう。

ユーゴ、チェコの登山家もしばしば注目すべき登攀をなしとげるが、エベレストの冬期初登頂はじめ、ビッグ・クライムというと、ポーランドの登り手たちの印象が強い。実力では（変な言い方だが）、メスナーをしのぐといわれる男たちが何人かいる。

たとえばこの一月十一日、イエジ・ククチカと共にカンチェンジュンガ（八五八六㍍）の冬期初登を果たしたクシストフ・ビエリッキである。八〇年のエベレスト冬期初登者でもあるビエリッキは、八四年七月十四日、ブロード・ピーク（八〇四七㍍）のベースキャンプからこの山への「日帰り登頂」をやってみせた。午前零時二十分に出発、七二〇〇㍍の第二キャンプで二時間仮眠をとり、午後四時頂上に立った。そのまま下山にはいり、十時三十分にベースに帰った。標高差三千百五十㍍。他のメンバーがルートをつけ、すでにキャンプがあったとは言え、信じられない八千㍍峰でのスピードぶりだった。

八千㍍峰十座を登った前述のククチカ、それにククチカと共にガッシャブルムⅡ峰（八〇三五㍍）縦走と、Ⅰ峰（八〇六八㍍）南壁の初登を連続でやったボイチェク・クルチカの強さもよく知られている。男たちだけではない。エベレスト女性第三登で知られるワンダ・ルトキエビッチ、BCから女性二人だけでブロード・ピークに登頂したアンナ・チェルビンスカとクリスチナ・パルモフスカら女性クライマーの活躍も光る。

なぜ、あなたたちは強いのか、と聞かれ日本ヒマラヤ協会の会報「ヒマラヤ」最新号の中で、ボイチェク・クルチカは「たぶん精神面での強さと思うが、それはポーランドという国が二つの強い国、ロシアとドイツにはさまれて、常に抑圧を受けてきた歴史の中で育くまれたからだ」と言っている。自由に対する強い欲求が反抗精神を生み、集中力、粘り強さをもたらす結果になっている、というのである。

ポーランドについて初めて触れた日本の文献は、一七一五年に完成した（発刊は明治になってから）新井白石の「西洋紀聞」といわれる。「ポローニャ、漢に訳して、波羅泥亜、といふ。ゼルマアニヤの東にあり」と、白石は書いた。それから二世紀半を経て、私たちはショパン、アウシュビッツ、コルベ神父、そして「連帯」などの人やイメージで、バルト海に面するこの国をとらえるようになった。そしていま、ヨーロッパ・アルプスやヒマラヤの高峰で活躍するクライマーたちのエネルギーの中から、これまで知らなかったポーランド人の一面を、私たちは新たに教えられるのである。

五月中旬、アンジェイ・ザヴァダ冬期エベレスト隊々長、ビエリッキら七人の登り手たちが日本山岳会の招きでやって来る。彼らが何を話すか楽しみだ。

（江本嘉伸）

つくし、兄や友人を敬うようにとさとし、名声や富や地位よりもそのほうが大事だと書くところは、「教育勅語」の趣きを思い出させ、「明治人」アーネスト・サトウを見るおもいがする。

一九二五年二月十四日付、夫人への手紙は――。

「Koishiki Okane San

Many thanks for your letter of January 3. I am very glad to learn that the whole family is well.」

以上、引用の手紙がいずれも尻切れトンボなのは、手紙がすべてガラスケースの中に展示されていて次のページが読めないためである。

アーネスト・サトウという傑出した人物が明治維新前後に日本とかかわりを持ったことがどんなにその後の日本に大きな意味を持ったかがわかると同時に、武田久吉という私たちに身近かな人に、より大きな親しみを持つことができるようになった展示会であった。

（大森久雄）

（編注）

日銀の統計資料室には明治七年（一八七四年）からの資料しかなくこれによると一ポンドは約五円。その頃、新橋から横浜までの鉄道運賃は上等が一円、中等六〇銭、下等三〇銭。通訳生サトウの月給は約八三円ということになる。

東西南北

山岳博物館を考える会

八十周年記念行事準備などのためしばらく休んでいたが、二月十三日、昭和五十九年四月の第一回よりかぞえて五回目の会合があった。次回は六月三十日（月）六時半です。

関心をお持ちの方は是非お出で下さい。

出席者　佐々保雄、中村純二、坂倉登喜子、平柳一郎、梅野淑子

第二三回 木暮理太郎翁碑前懇親会 報告と第二四回の予告

昨年五月十八日夕方より、碑前祭開催。碑の維持管理修理などに専門的手腕を発揮していた、松本熊次郎氏の姿を再び見ることがなくなり、淋しさ限りなし。

霧の旅会創立発起人の一人、山崎金次郎氏の「もう来年は来ることは無理だろう」はこの五年程前からの極り文句で一同爆笑。恒例となっている初参会者の一言。今

図書紹介

お花畑 ―高山の花々 布施正直著

高山植物の写真集は沢山出ているが、これは複雑な自然環境の中で多様な美しさを見せるお花畑の写真集である。

全体を四つに分け「湿原の四季」は尾瀬の融雪期から新雪までの花々の饗宴を、「岩稜を飾る」では北アルプス白馬岳及び南アルプス北岳を中心に乾性のお花畑を、「雪渓に沿って」は雪渓や雪田の豊かな水湿に恵まれたお花畠を、最後に「花の島」として日本最北の島、きめこまかな植生を見せる礼文島と、荒々しい利尻岳を彩る花々を紹介する。それぞれ特産種など個別の写真も織りこんで、美しい写真集となっている。主にブロニー版による写真は一つ一つ撮影データも記されていて親切である。

神奈川県立博物館の大場達之氏によるお花畑についての解説が加えられている。様々の要因によって様々の草原、様々の荒原ができそこに適した花が咲く。荒原でも構造土礫荒原にはタカネスミレやウルップ草、コマクサなどが咲き、同じ雪田底地荒原でも、雪どけの終らぬ中に雪のくる所では蘚苔類にキンスゲが混じるだけだが、八月半ばに雪が融ける所ではミヤマタネツケバナ、タテヤマキンバイ、クモマグサが咲く。岩上や岩隙では何、と細かに例をあげて説明してあり、読んでいくうちに今まで見てきたお花畑が目に浮かび、うなずけることが多い。

後半は著者の礼文・利尻の取材記、白馬及び北岳の取材記、並びに著者のライフワークとするところの尾瀬の花の記録がのせられている。尾瀬を一八コースに分け、そのコース上にみられる花々と、その盛期を記してあるので、ここを訪れる人には便利な花の歳時記となろう。

著者は多摩芸術学園写真科で学び、一貫して自然や花の写真を撮って来た。必ずしも日本全体をカバーせず、また特定の地域の高山植物を系統的に並べたものでもないが、日本のいろいろな形のお花畑の美しさはよく捉えられていて楽しい写真集である。

B5判　昭和六十年六月三十日発行　保育社刊　一五〇ページ　中カラー図版七二ページ　定価四五〇〇円

（中村あや）

ミズバショウの花いつまでも 蜂谷緑著

明治三十六年五月十二日。その日は桧枝岐の愛宕祭りだった。この山深い寒村のたった一つの娯楽である祭りは、朝からおはやしがなりひびき市がたってにぎやかだった。夜はゆれ動くローソクの光の中で奉納歌舞伎が演じられ高い三味線の音がひびいていた。その日平野長英氏が誕生する。祭にも出ないで父長蔵氏は、ひっそりとおしころした喜びでその誕生を祝っている。

思わず引き込まれる情景から物語りが始まる。そしてその長英氏を中心に先代の長蔵氏、若くして逝った三代目の長晴氏の

山をきれいに ゴミは持ち帰ろう

年はめずらしく、木暮先生の生家近くに実家を持つ、千葉の小暮國昭氏が見え、その奇しき因縁を語る。

夜、堀口丈夫君をシェフとする甲州勢による山菜料理の数々は好評。それにつけてもアルコールの消費量、さすがジャパニーズ・アルコール・クラブの裏称を誇る、J・A・C。

二次会は、有井館の前庭の薪の火をかこんで夜おそくまで歓談が続く。

さて、翌日は、長駆中央道をとばし、初鹿野、景徳院を訪ね、武田家の終焉に思いをいたす。焼山林道に入り、湯ノ沢峠まで車をあげる。大菩薩南嶺を北上、一九八五㍍（年号と同じ）しかも丑年にちなんで、牛奥の雁ヶ腹摺山へ。山の優雅を楽しむ組は、途中の白谷ヶ丸のカヤトの原でワインパーティ。さらに、ウド掘りに精出す組も。かくて、来年の再会を約し流れ解散となる。

もう木暮先生を知る方々が少なくなってきている。しかし、先生ゆかりの方々の二世、三世がご参加になることはありがたいことである。例えば、神谷恭氏のお孫さんたち、山崎金次郎氏のご子息。金山淳二氏のご令嬢。三井松男氏の娘さんやお孫さんたち。

また、JACの非公認の会合であるにもかかわらず、今回も、島田巽、交野武一両名誉会員のご参加をいただいたことなど、地元世話人として、ありがたいことと思っている。

参加者・順不同　近藤久子、佐藤栄、山崎金次郎、杉山都子、小林啓助、山村秀子、小松崎幸子、金子弘枝、山本稔、杉本賢治、金山陽子、佐藤文宏、佐藤茂子、佐藤、佐藤匡、蜂谷緑、泉久恵、込田伸夫、三栖寿生、近藤友好、小林基子、河野幾雄、奈良洋子、山本美津子、森武昭、鳥居亮、高田真哉、高橋晋作、名児耶達男、島田巽、交野武一、岡部みち子、金山淳二、前田清子、田村英也、小暮國昭、牧野衛、藤崎快、滑志田隆、鶴岡元之助、山崎郁郎、堀口丈夫、平井和雄、今井洋地、近藤信行、石垣政雄、山村正光、以上、四十七名。

＊

《予告》　本年は次の要領で開催いたします。多数の方々のご参加をお待ち申し上げます。

記

日時　五月十七日（土）～十八日

場所　山梨県北巨摩郡須玉町金山

交通　中央線韮崎駅下車、増富ラジューム温泉行きバス終点下車、徒歩一時間半。有井館に電話いただければ当方にてお迎えにあがります。

宿泊　金山平、有井館

☎0551450455

行事　十七日、PM4・30　碑前祭、PM6・00　懇親

図書紹介

三代にわたる平野家と尾瀬とのかかわりあいを画き、尾瀬の自然の美しさ尊さを語っていく。本書は小・中学生以上を対象としたノンフィクションシリーズの一巻だったが、私でも我を忘れて読み進めたのだから、感受性豊かな少年少女諸君には大きな肝銘を与えるに違いない。

著者は五八年に「常念の見える町」を出してから翌五九年に「尾瀬ハイキング」、そして六〇年に本書とたて続けに毎年一冊山の本を書いている。著者のお人柄から健筆という形容は似つかわしくないが、やはりペンの健やかさには違いない。しかも一作目がわれわれ大人向きの温い情感あふれる山の文章であったのに対し第二作は中・高校生向き、そして今回は小・中学生向きの著書である。コミュニケーション回路の豊かさというのか、どういう年令を対象にしてもなめらかに語りかけていく文章を持っていることは驚くほかない。

本書は単なる平野家三代と尾瀬との係わり合いでなく尾瀬という自然の宝庫の大切さを淡々とした筆致で語っている点で大いに声援を送りたい。また日頃山の自然保護について考え行動しているわれわれが、かねがね感じていることは、委員会などでの公式なアクションは一般の耳目にふれることが少なく、われわれだけの自己満足に終ってしまいがちなので、出版や映像を通じての啓蒙が欲しいと思っていたが、その点でも、このような出版物が子供たちに読まれ母親達の目にふれることは意義深いと考える。

一六〇ページ、挿絵も多く活字も大きいから量的な制約もあるのに、考証もしっかりしていて内容に手ぬきはない。

われわれも一読の価値がある。

一九八五年十月十六日　校成出版社刊　一六三ページ　定価一二〇〇円　**（国見利夫）**

黄色いテント

田淵　行男著

出版社から、著者寄贈と印を押して、田淵行男さんの部厚い本が送られてきた。高山蝶や山の写真の見事な作品は、兼ねてから親しんでいるが、お目にかかったことも無いのに、いぶかりながら開くと、拝呈と御自筆まで添えられてある。

田淵さんの写真集類は、数えきれないほどだが、随筆集は初めてという。

早速、ひもどいて、先ず「上高地のトリオ」を見ると、羽化したばかりのミヤマシロチョウの写真……。田淵さんならではの特色に打たれた。

山に親しまれること四十余年、今とは「別世界のように原始の静けさを保ち、自然も無傷で豊かで魅力に満ち、いわば古き良き時代であった」と、自序に述べられる田淵さんの随筆と写真である。

それより前の六十年あまり、山に入っているわたくし…、上高地や穂高一帯にも大正九年（一九二〇）からの春夏秋冬を味わっているわたくしは、思わずうなずきながら読みふけった。

お礼状のお返事に、七年前から難病にとりつかれたと書かれてたが、そのお悩みの年月によくもまとめられたもの、あらためて、美しい口絵から各ページの文も写真も見なおした。

登山の記録のみ目立つ山の本の多いこのごろ、好む山の麓に住居まで移して没入され、黄色いテントを独りかついで山に入る田淵さんのこの新著は、失われた「古き良き時代の山」と人を、知る者にも識らぬ者にも語ってくれる名著である。

一九八五年十一月二十日　実業之日本社刊　三七七ページ　三八〇〇円

（村井米子）

図書紹介

会。十八日、記念山行、御坂山塊前衛（芦川上流）の釈迦ヶ岳（一六四一㍍）、車をおりて徒歩二時間。

会費 一泊二食、山行交通費をふくめ、一人 八千円

定員 四十人前後。

申込 五月十日まで、〒400甲府市武田三―六―二七 山村正光まで。

☎0552513175

三水会例会山行
三峰、妙法ヶ岳と羅漢山

（八六・一・十一～十二）

今年最初の現地集会は、山より新年会に目的があったようだ。

氷も空気もゆるんでいたが、三峰神社の亭亭の老杉に心がひきしまる。妙法ヶ岳へのはだれ雪の小径をたどって、四方に尾根をひろげる和名倉山や、屹立する両神山をふり仰ぐころには日は傾き、いま来た径を今宵の宿白久（しろく）の谷津川館へ急がなければならなかった。

翌日は波久礼から円良田（つぶらた）湖をへめぐり、山麓に少林寺を擁する羅漢山へ登る。

頂上から古刹への山径にいならぶ夥しい石仏は、冬枯れの疎林の中に喜怒哀楽の表情が風化して、そのおもてには、法悦と炎に似た猥雑のかげりだけが顕われている。そして阿羅漢の一瞥は、昨夜の酒宴に演じられた奔放で哀切な男と女の胸のうちを忖度して、生きているうちに頑張りなさいと語りかけているようだ。こんな仏だのみをうべなうほど昨夜は酔った。エーデルの方々が、どうしてあんなに妖婉にみえたのだろう。

帰路、小川町の「忠七めし」での別れの会で、枡酒を口にふくみながら山のことなど忘れていたし、老杉と石仏とまぶしいほどのひとたちが奇妙な色や形に織りなされて、私たちをものがなしい少年の日にたち帰らせていた。

出席者 坂倉、斉藤(健)、高田、斉藤（直）、二宮、松井、大木、平柳他六人 （平柳一郎）

報告

会員懇談会
『車窓の山旅・中央線から見える山』

総務委員会

二月の会員懇談会は、十四日、『車窓の山旅・中央線から見える山』の山村正光さんにお越しいただき、車窓からの山の展望にまつわる楽しいお話を伺った。

同書は、中央線の車窓から見える山々が、車掌として中央線に乗車四千回という経験と、実地踏査・史料による裏づけによって内容豊富な文章で紹介されているとあって非常な好評を博しており、すでに十版を重ねているという。会員の関心も高く、加うるに山村さんの人気もあって、定刻には参加者がルームを埋めつくすという盛況であった。

山村さんは、冠松次郎氏の「山への味倒」を引用しながら車窓から山を眺めることの楽しさを紹介するとともに、小島烏水、木暮理太郎、中村清太郎といった日本山岳会の先輩が山岳展望に残してくれた足跡を紹介し、現在、われわれが車窓から山を眺めているのはそれら先輩の足跡を辿っているにすぎない、と語った。そして、その足跡の延長線上に位置づけられるともいえる幾つかの発見―富士山、北岳、奥穂が同時に見える東京起点一六七・五㎞地点、下諏訪からの経ヶ岳、信濃川島からの塩見、荒川、赤石等々―についての発見の歓びを語り、そうした歓びや登山の楽しみは「戦争になれば一発で終わりになってしまう。平和なればこそであるとしみじみ思

報告

高所障害の後遺症についての講演会

医療・集会・高所・遭対・指導各委員会

二月十三日、日大・川久保芳彦先生により、「高所障害の後遺症について」の講演が、ルームで行なわれた。その要旨は、次のようなことである。

＊

八千メートル無酸素登山後に、自覚症状として物忘れ・記銘力障害を訴えた二十六歳男性登山家の実例を提示して、登山前後における、（一）有関係（汽車―電車）・無関係（トンボ―日本酒）連結語テスト―無関係連結の結果が悪い、（二）ベントンの視覚記銘力テスト（図形認識テスト―一定時間図形を認識させ再現させると図形を誤認してしまう）、（三）クレッペリン検査（作業量の低下）、（四）脳波テスト（脳の覚醒レベルの低下、発作波の出現）、（五）知能テスト（簡単な言葉の概念がよくない）等の結果から、この登山者には明らかに前頭葉から頭頂葉にかけて脳実質の器質障害が明らかにされた。また、この登山者の同僚は、この登山者が二回目の無酸素登山後、日本の冬山で、考えられないような滑落事故（発作性）を目撃している。

この実例から理解されることは、低酸素状態と前頭葉の機能障害（注意力の減退、プログラミングの不適格性）とは密接な関係があるということである。最近の無酸素登山で、下山中の事故、二回目以降の事故が目につくのは、この前頭葉の器質障害が存在しているからと推察される。また低酸素状態下での被歴現象（一度、低酸素状態下で器質障害が起こると、二回目以降、低酸素状態にさらされると、その異常現象が出現しやすくなる）も事故につながる一因である。

以上のようなことから、山登りに対する種々なるポリシーは別として、仮に一回目は無酸素で登っても、二回目以降は、脳の器質障害を念頭において行動したいものである。

一例で物を言うのは危険であるが、事実は事実としてとらえることは大切なことである。

遠征前後における身体チェックが充分に行なわれ、症例のつみ重ねによって、一層低酸素の影響を明らかにして行きたい。 （浜口欣一）

う」と結んだ。

続いて、〝友情出演〟をお願いした近藤信行さんが、われわれに山岳展望の楽しみを教え、優れた仕事を残してくれた日本山岳会の先輩を紹介しながら、「何びとにもまねのできない経験を元にして、踏査と永年の蓄積によって書かれた山村さんの『車窓の山旅』は、新しい発見を含めて、山岳展望文学の系譜の中に堂々と位置する労作である」との評価を与えた。

参加者　六十四名

（南川金一）

真狩スキー合宿

北海道支部

支部恒例のスキーバスにかえ、今年は、後方羊蹄山南山麓の真狩村山丈荘でスキー合宿が、三月八日（土）、九日（日）の両日、行なわれた。

この集いに参加したのは橋本支部長以下十六名、八日午後四時を廻る頃より続々馳せ参じ、車九台が行き止りの道路に並ぶ。午後五時より支部委員会。先ず支部長挨拶、続いて議題の、61年度事業、支部役員の推薦、支部規約一部改正、東京の支部長会議報告が行なわれた。

午後六時、楽しい夕餉は、ビールで乾盃、フランスパンに珍味をのせたカナッペ、塩漬けの豚肉を煮込んだシチューネンポトフ（洋風おでん）を肴に大いに飲み食い、支部の活性化のご意見を受給わる。

翌九日の早起きは、登山組と、飲んべい組である。登山組は、正午には外輪に達する大久保、亀井の二名、飲んべい組は、朝から迎え酒そして、朝食の餔飩で小薩張りと！

支部長自ら入れて下さるコーヒーで体内の C_2H_5OH を除く努力をし、またの支部行事での再会を約し散会とする。

参加者　野田四郎、井出雅人、三浦勝幸、橋本誠二、平野明、亀井秀子、澤田長子、土屋一彦、高澤光雄、大久保五郎、佐々木孝雄、小林年、久保田優一、河村皆子、柳田凉子、坂田昌実、河村耕平。

会務報告

二月理事会

2月12日　午後6時50分

場所　本会ルーム

出席者　今西会長、大塚副会長、鳴原、橋本、大橋、浜口、梅野、鈴木、新井、岡沢、関塚各理事、中村、松田、宮下各評議員

委任　山田副会長、高遠、絹川、太田各理事、竹田監事

審議事項

◎会費改訂（案）について

二月五日開催の支部長会議の意見を参考にした財務委員会案を提示、審議の結果、総会に定款変更

図書受入報告

図書委員会

昭和60年7月分受入図書

1. 秋田県「粕毛川源流部自然環境調査報告書」秋田県自然保護課　1985（版元寄贈）
2. 平田恒雄編「ながれ星　佐田友啓壮，八橋健治遺稿及び追悼」広島山の会　1985（版元寄贈）
3. 佐藤勉著「我が南会津」現代旅行研究所　1985（佐藤勉氏寄贈）
4. Miller Mike "Alaska; the great land" Sierra Club 1974（佐々保雄氏寄贈）
5. "Зверест-82" Физкультура и спорт 1984（購入）
6. 早稲田大学山岳部編「時報　第24号　アンデス合宿報告」早稲田大学山岳部　1985（版元寄贈）
7. 山岳巡礼倶楽部編「ガムス　五十周年記念号」山岳巡礼倶楽部　1985（版元寄贈）
8. Mayer Gert "Berg '85 Alpenvereinsjahrbuch"
9. 周正著「氷山雪嶺二千年，中国登山史話　山岳名著選集」ベースボール・マガジン社　1985（版元寄贈）
10. 相馬勉編「日本山岳会学生部ボゴダ山登山隊　1982年の報告」日本山岳会学生部ボゴダ山登山隊　1982（版元寄贈）
11. 芦沢一洋著「アウトドア・ものローグ」森林書房　1985（版元寄贈）
12. 永田芳男著「高山植物　基本50」森林書房　1985（版元寄贈）
13. 水野仲彦著「きのこ　基本50」森林書房　1985（版元寄贈）
14. 永田芳男著「野の花　基本50」森林書房　1985（版元寄贈）
15. 上村幹雄著「片雲往来　私の山路歴程」学生書房　1985（井口正男氏寄贈）
16. 上村幹雄著「私の山路歴程（年譜），昭和58年までの山行他」学生書房　1985（井口正男氏寄贈）
17. 飯田睦治郎著「登山入門シリーズ　7　山の天気と予知」山と渓谷社　1985（版元寄贈）
18. 岡本洋典著「雨竜沼　秘められた北の湿原」北海タイムス　1985（岡本洋典氏寄贈）
19. 林弥栄著「日本の樹木　山渓カラー名鑑」山と渓谷社　1985（版元寄贈）
20. 白石勝彦著「源流の釣り，大イワナの世界」山と渓谷社　1985（版元寄贈）

8月分受入図書

1. 高橋喜平他著「岩手の山やま」谷印刷出版部　1985（高橋亨夫氏寄贈）
2. 小池潜著「日本の名峰　21　雲ノ平・笠・裏銀座」山と渓谷社　1985（版元寄贈）
3. 大谷尚樹　新隆浩共著「登山入門シリーズ　8　山の危険とサバイバル」山と渓谷社　1985（版元寄贈）
4. 阿部和行著「水と神話の国ぐに」水道産業新聞社　1985（阿部和行氏寄贈）
5. 文部省「高みへのステップ，登山技術」東洋館出版社　1985（山田二郎氏寄贈）
6. 文部省「高みへのステップ，登山技術」東洋館出版社　1985（文部省寄贈）

9月分受入図書

1. 栗林一路著「登山家の古典散歩」新潮社　1985（版元寄贈）
2. 杉本誠著「山の写真と写真家たち」講談社　1985（杉本誠氏寄贈）
3. 新妻喜永著「日本の名峰　15　八ガ岳連峰と蓼科山」山と渓谷社　1985（版元寄贈）
4. 白籏史朗著「山に憑かれて」成美堂出版　1978（版元寄贈）
5. 白籏史朗著「続・山に憑かれて」成美堂出版　1985（版元寄贈）
6. 竹中昇著「風狂を尽して，竹中昇遺稿追悼集」創作社　1985（竹中裕氏寄贈　2冊）
7. 内田良平著「ネパール百描」小学館　1985（内田良平氏寄贈）

として提案し、六十二年度より会費を改訂することにする。　承認

◎京都支部設立承認の件

発起人代表今西錦司氏より、支部設立に必要な関係書類を添付した設立申請書が提出された。検討の結果　設立承認

◎国際アルピニストシンポジウム後援依頼の件　承認

報告事項

◎支部長会議報告

二十支部のうち、福岡、岐阜支部以外の十八支部より出席。会費改訂問題について理事会側より提案、説明、討論。その他事務報告。支部ブロック懇談会の計画等説明。

◎各委員会報告

図書、自然保護、医療、海外、山研、集会、総務各委員会より活動報告、行事予定等について説明あり、総会を五月十六日（金）に開催することが決定。

追悼

名誉会員　交野武一氏

（会員番号一〇六八）

二月十四日朝刊をひろげて我が目を疑った。「交野武一さん焼死」昨夜の電話が悪夢のように思え、生前の彼の姿が走馬灯となって駆けめぐりだした。上京するときは山靴でルックを背に立ち寄られ、盃を手にして犬猫の長い話しの続くのが常であった。

最後の電話での一こまはこんなことだった。

おれがマッキンレーに行くとき槙さんが見送って来られ「隊長は臆病でなければいけないよ」と言われ、それを守って来たんだ。だけどおれは生れつきとても臆病で気が小さいんだよ。

この話しは豪快にみえる彼が本心を正直に、素直に話してくれたのだと思っている。私が彼にほれる理由がこのへんにあったのだ。多くの古典をひもとき山里の生活に自由を求めていた彼に、世の人びとの批判もあろうが、誰にも出来ないことをやったのだ。それはエヴェレストよりも高い。

（辰沼廣吉）

高橋照氏

（会員番号三〇四七）

通称テルさんは東京で生まれ、中央大学在学中に前穂高四峰正面壁、三峰の新ルート開拓の記録を残す。「山人クラブ」に入り福島周二代表から岩登りの手ほどきを受け「日本登高会」では海野治良氏と組んで「山と闘う」「氷雪技術」を共著で発刊した。

戦後、JACと「山岳巡礼クラブ」に入会し、岳連運動に尽力された。一九六二年全日本山岳連盟の第三ジュガール・ヒマール登山隊隊長としてビッグ・ホワイト・ピークに挑み、七人の全隊員を初登頂させた。この記録をテルさんは十六ミリ映画に収録した。その映画がこの年の「民間テレビ・ドキュメンタリー部門最優秀賞」を獲得し、その撮影技術は高く評価された。

学生時代からの酒豪で、映画「富士山頂」の技術指導で主演の酒豪藤田進氏と山頂で飲みくらべをして勝ったと自慢していた。正調安曇節を上手な節まわしで歌ったり、スキーも一級の腕前という器用人でもあった。

七一年には東京都山岳連盟のマナスル西壁登山隊隊長を引受けて困難なルートからの登頂に成功した。

恋愛結婚したその夫人との間には二男一女をもうけたが、家業の釣問屋は家族にまかせ「ヒマラヤ浪人」をきめこみ、毎年の大半はネパール暮らしをし「秘境ムスタン潜人記」「ネパール曼陀羅」などの著書を発表し、友人達を煙に巻いていた。土曜会メンバーとし話術家振りを見せていたが、六〇年六月食道がんが発見され、コバルト治療で全快したと言っていたが脊髄に転移していて、本年二月二十一日帰らぬ人になった。享年七十一歳。

今年は私の年、寅年なのでキッと良くなると言っていたのに……。

（高橋定昌）

＊

土曜会をこよなく愛していた照さんの訃報を突然、羽賀正太郎君から受けた。

去年、千葉のがんセンターで光線照射により病原を根絶したと、喜んでいた姿が目に浮んでくる。カトマンドゥに居ることの多い彼であるが、在京中は土曜会が唯一の楽しみであったようである。いつもルームの奥であぐらをかき、草履ばきの気どらない照さんが眼から離れない。

流石、照さんのお葬式だ。古い友達は勿論、若い連中の多くは遠征隊で、またはトレッキングで世話になった人達のようだ。

照さん、君は幸せな人だ。人間は死んだときその人の価値が判るというが、こんなに多くの人に惜しまれて……。そうはいうものの、やはり生きて居てほしかった。

土曜会は照さんという目標がなくなった。悲しく淋しいことである。でも照さんは今ごろブータンあたりの空を大勢の山友達と飛び廻っていることでしょう。

照さんどうぞ安らかにお眠り下さい。心からご冥福をお祈りいたします。

（星野　重）

ルーム日誌　二月

3日（月）　合同登山打ち合せ
5日（水）　青懇、ブータン講演会
6日（木）　学生部集会
7日（金）　図書委員会
8日（土）　支部長会議
10日（月）　自然保護委
12日（水）　理事会
13日（木）　医療委講演会
14日（金）　会員懇談会
15日（土）　山岳図書を語る夕
17日（月）　総務委
18日（火）　婦懇委員会
21日（金）　会報編、医療委
24日（月）　総務委
25日（火）　婦人懇談会研究会、自然保護委
26日（水）　フィルム委、財務委
28日（金）　科研委

今月の来室者543名

会員移動

退会

9442　大谷　悦子
8321　油井　宏
7179　飯田良太郎

支部変更

9081　前田菊太郎（信濃支部へ）

物故

1068　交野　武一（2・13）
6387　荻　千賀（2・9）
3047　高橋　照（2・21）

JAC 総会は 5 月 16 日（金）です

スイスの有名
ピッケル
ベンド
輸入しました。

〒114 東京都北区豊島4-12-1
つゝ美　03-914-3240

JAC70周年記念出版として好評10年…この機会に山の古典を味わってみませんか！

覆刻 日本の山岳名著
全18点22冊
解題書・特別資料付
企画・編集／日本山岳会
現金価格190,000円

日本風景論　志賀重昂
日本山嶽志　高頭　式編
日本アルプス　全四巻　小島烏水
アルペン行　鹿子木員信
日本アルプスと秩父巡禮　田部重治
山　行　槇　有恒
黒部谿谷　冠松次郎
山—研究と随想　大島亮吉
山と雪の日記　板倉勝宣
雪・岩・アルプス　藤木九三
尾瀬と鬼怒沼　武田久吉
スウィス日記　辻村伊助
ハイランド　辻村伊助
氷河と萬年雪の山　小島烏水
北の山　伊藤秀五郎
山岳省察　今西錦司
Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps
日本アルプス登山と探検　ウォルター・ウェストン
別巻　山の憶ひ出　全二巻　木暮理太郎　新装増補版
●解題書
覆刻日本の山岳名著解題　日本山岳会編
●特別資料
日本山岳会「會報」覆刻合本　第一号～第一〇〇号

新選 覆刻 日本の山岳名著
全20点29冊
解題書・特別資料2点付
企画・編集／日本山岳会
現金価格175,000円

名山圖譜　全三巻　谷文晁
迦多賀嶽再興記　播隆上人
信州鎗嶽畧縁起　播隆上人
石狩日誌　松浦武四郎
山岳紀行六種（私家版）　松浦武四郎
乙酉掌記　他五種
歐洲山水奇勝　全二巻　高島北海
富士案内　野中至
西蔵旅行記　全二巻　河口慧海
山水無盡藏　小島烏水
ヒマラヤ行　鹿子木員信
劔澤に逝ける人々　東京帝國大學山の會編
山岳美觀　吉江喜松
山の繪本　尾崎喜八
先蹤者　大島亮吉
白頭山　京都帝國大學白頭山遠征隊編
アルピニストの手記　小島烏水
ナンダ・コット登攀　竹節作太
山に描く　足立源一郎
Playground of the Far East　ウォルター・ウェストン
山岳礼拝（新編集）中村清太郎
●解題書『新選覆刻日本の山岳名著解題』日本山岳会編
●特別資料㊀
日本山岳会『會報』第一〇一号～第二〇〇号
●特別資料㊁
播隆上人筆『鎗ヶ嶽繪圖』

大修館書店
●内容見本呈
〒101東京都千代田区神田錦町3-24 振替/東京9-40504 電話(03)294-2221〈大代表〉
在庫僅少！

お知らせ

◉海外委員会より二つ

▽ポーランド山岳会員との交歓登山

本会が例年行なっている海外友好交歓登山の一環として本年はポーランドから冬期エベレスト遠征隊のアンジェイ・ザヴァダ隊長、初登頂者のチフィ、ビエリッキ両隊員を含む七名をお迎えします。

一行は五月十四日に来日し、小川山や穂高岳へ登山しますが、五月十八日は箱根周辺、二十四・二十五日は富士登山を会員相互の交歓のため行ないますので、会員諸氏が奮ってご参加下さるようお願いします。

なお、六月一日はウェストン祭に、六月二日は、十八時から新宿の安田生命ホールで行なわれる『映画と講演会』に参加されます。詳しくは事務局にお尋ね下さい。

▽映画『植村直己物語』観賞券

六月七日より東宝系の映画館で上映されます。会員だった植村氏が行った、世界の風景が綺麗に撮れています。

観賞券一五〇〇円を一二〇〇円でお頒けします。お求めは事務局まで。

海外委員会

＊

◉東北ブロックシンポジウム（山形）

岩手・宮城・福島・秋田・山形の東北五支部集会を次の通り開催します。他支部の会員も大歓迎です。奮って多数ご参加下さい。

日時 五月二十四日（土）、二十五日（日）

場所 湯殿山 仙人沢参篭所に三時集合、受付

行事 二十四日、午後三時三十分支部事務担当者打合わせ。四時、月山の地学または修験道に関する講演。六時、懇親会。

二十五日、スキーパーティは仙人沢―志津―姥ケ岳のスキー。登山パーティは仙人沢―湯殿山神社―月光坂―姥ケ岳

◎両パーティとも姥ケ岳にて十時に解散

会費 一万円

申込締切 五月十日までに山形支部 村上勝太郎（〒997 鶴岡市本町二ノ三ノ一 電話 0235-22-0567）

＊

◉第六回「日本登山医学シンポジウム」開催のお知らせ

私達、山行を行なう際、山の高い低いにかかわらず身体には、呼吸機能、循環機能、消化機能、代謝、寒冷ストレス等、さまざまな負荷が加わります。

三千メートルの北アルプスでも、身体の具合が悪い時には、山酔い現象（頭痛、呕気、下痢、便秘等）―高山病の一種―が出現します。

日本登山医学シンポジウムは、医者ばかりでなく、山に行く人達の中で医学的現象に興味を持つ人達の勉強会です。今回は、特別講演として、細胞レベルでの高山病の話も用意されております。

皆様、お誘い合せの上、是非ご出席下さい。

記

会期 五月三十一日（土） 十三時～六月一日（日） 十二時終了

会場 聖マリアンナ医科大学 川崎市宮前区菅生二〇九五

特別講演 大平充宣 助教授 ワシントン医科大学・内科（低酸素状態が細胞の代謝にどのように影響し、細胞はそれに対してどのように適応するか、低酸素下で骨格筋及び心筋の酵素活性はどのように変化するか）

懇親会 五月三十一日（土） シンポジウム終了後

会長 長尾悌夫 聖マリアンナ医大・整形外科教授

医療委員会

＊

◉若葉会山行のお知らせ

集会委員会の第十回若葉会山行を左記の通り開催致します。

日時 六月十四日（土）～十五日（日）

場所 苗場山（二一四五メートル）

コース A 和田小屋～苗場山～小赤沢（約八時間）

B バスにて小赤沢へ入り苗場山に裏側より途中まで登る。

集合・解散 六月十四日（土）午前七時、越後湯沢駅前集合。十五日（日）朝、現地にて解散。

参加費 九五〇〇円（宿泊代・夜朝食代・懇親会費を含む）

※前日十三日（金）現地宿泊希望の方は、素泊り三五〇〇円（十四日山行時の昼食手配も可）の宿をご紹介致しますので、その旨ご連絡下さい。

※なお、山菜勉強会を五月三十日にルーム（会費八〇〇円）で行ないます。

※申し込みは五月二十日までに事務局にお願い致します。

集会委員会

◉新版・山日記のお知らせ

会報十二月号でお知らせしたように、今年度から山日記は当年七月から翌年七月までのカレンダーとなり、版型や体裁も変わります。横八五ミリ、縦一四五ミリ、厚さ約八ミリ、胸のポケットに収まる大きさです。刊行は六月中旬予定。会員手帳として、全会員の皆様にご使用いただければ幸いです。

山日記編集委員会

昭和六十一年四月二十日発行
102 東京都千代田区四番町五―四 サンビュウハイツ四番町
発行所 社団法人 日本山岳会
発行者 今西寿雄
編集代表 岡沢祐吉
電話東京（261）四四三三
振替口座 東京三―四八二九番
東京都港区六本木三ノ一ノ三〇 ABビル
印刷所 株式会社 技報堂